

ロジェ・マルクスの「社会芸術」思想とルネ・ラリック —1925 年のアール・デコ博を中心に—

青木 智子

1925 年、パリ開催の現代産業装飾芸術国際博覧会（以下、アール・デコ博）で、メインストリートの終着点に置かれた噴水塔《フランスの水源》は、ルネ・ラリック（1860-1945）の装飾とマルク・デュクルゾーの設計による。行政書類上の正式名称は「クリスタルガラス製のモニュメンタルな噴水」である。「街頭の芸術」部門（第 4 グループの第 26 クラス）に出品された。高さ約 15 メートルの八角錐の噴水塔は電気照明を内蔵し、夜にはイルミネーションの一部となる。本噴水塔は河川と泉を象徴する 16 種類 128 体の女性像で構成される。量産された各段の女性像の大きさから、最上段には胸の前で両手を合わせる立像《噴水の女神、アリア》が配されたと推測でき、全体に祈りのニュアンスが加えられたと考えられる。アール・デコ博は下院議員シャルル＝モーリス・クイバの 1906 年の提唱に始まり、ロジェ・マルクス（1859-1913）の評論の影響を受け、フランスの第 1 次大戦後復興と最新の生活様式を示すため 1925 年に開催された。公式カタログで本博の起源のひとつはマルクスの「社会芸術博」とされる。

オリヴィエとメヌーの先行研究では、ラリックのガラス製品にブルジョワ的豪華の表現が見られるため、ラリックはマルクスの「社会芸術」思想の支持者ではないとされる。しかし、マルクスが 1913 年の著書『社会芸術』でラリックを社会芸術の先駆者と捉え、マルクスの考える社会芸術に富裕層のための豪華な宝飾品が含まれたことから、ラリックはマルクスの「社会芸術」思想を共有していた可能性がある。マルクスは 1909 年に雑誌『ル・ミュゼ』に発表した装飾芸術国際博覧会開催を提言する評論「要求と主導の歴史に貢献すること」冒頭挿絵で、「社会芸術」思想とエジプトマニアを結びつけた。本発表ではイギリス査察団の報告書で噴水塔がオベリスクとみなされたことに注目し、噴水塔とマルクスの「社会芸術」思想をエジプトマニアにより関連づけられることを考察する。

アール・デコ博では、ナポレオンの眠るアンヴァリッドを背後とした構成より、噴水塔のオベリスク的側面が強調される。量産可能な垂直形態の女性像は死者が来世で平穏に暮らすためのエジプトの埋葬用小像ウシャブティを連想させ、大戦の犠牲者への鎮魂とフランス装飾芸術の覇権を視覚化する。ラリックがエジプトのモチーフを取り入れることは、マルクスの評論「フランスの主要な装飾家たち。ルネ・ラリック」の扉ページの図版や、評論「要求と主導の歴史に貢献すること」の扉ページの挿絵を想起させる。また、ラリックがアール・デコ博のガイドアルバムに掲載したエジプトのガラス職人を賞賛する文書にも、エジプトを軸としたマルクスとラリックの関係性が表れる。以上のことから、噴水塔《フランスの水源》にマルクスへのオマージュを読み取ることができるだろう。